



ラング世界童話全集



# ふしぎなこじきたち

川端康成★野上 彰



ラング世界童話全集

# ふしぎなこじきたち

ねずみいろの童話集



川 端 康 成 訳  
野 上 彰



川 端 康 成

ふしぎなこじきたち 川端康成, 野上彰 訳

ポプラ社 昭和38 (1963)

262p 挿絵 23cm (ロング世界童話全集・4)

[分類] 900

ロング世界  
童話全集④

著者との話し合い  
により検印を廃止



ふしぎなこじきたち

昭和38年5月30日 発行©

定価 350円

|     |             |
|-----|-------------|
| 訳者  | 川端康成<br>野上彰 |
| 発行者 | 久保田忠夫       |
| 印刷所 | 株式会社須藤印刷    |

発行所 株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5  
振替東京149271番

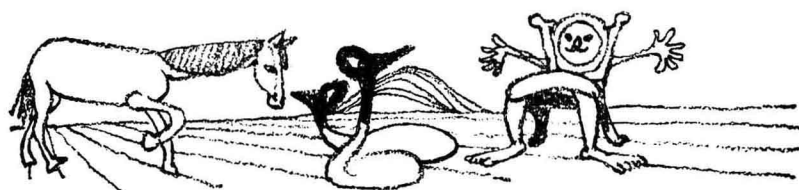
## は し が き

アンドルー・ラングの集めたこの童話のなかには、世界じゅうのすべてと  
いっても、よいほどの、子どもたちの夢があります。すなおな男の子もいれ  
ば、らんぼうな男の子もいます。やさしい女の子もいれば、いさましい女の  
子もいます。子どもたちのかわりに、動物たちが主人公になっている童話もあり  
ます。だが、その主人公たちみんなは、いつも、明るくて、健康で、正しい世界を  
きずきだすために力をつくすのです。「ラングの童話全集は、世界の子どもたち  
への精神の糧である。」と、有名な作家のバーナード・ショウが、書いていま  
すが、その意味は、あなたたちの心を養うために、なくてはならないものだとい  
うことです。

百年ものあいだ、世界の人たちが、子どものときに読んで、心を養った童話全集を、私たちは祈りをこめて、あなたたちへおくりたいと思います。



野川 端康 彰  
の 上 成  
み かん なる  
くら



## 目次

|               |     |            |    |
|---------------|-----|------------|----|
| ふしぎなこじきたち     | ……… | (セルビア) ……  | 六  |
| 王子と竜          | ……… | (セルビア) ……  | 二四 |
| 小さな野ばら        | ……… | (ルーマニア) …… | 四  |
| うしなわれた花ぞの     | ……… |            | 五  |
| ひつじ飼いのポール     | ……… | (ハンガリー) …… | 七  |
| 王さまのご健康を！     | ……… | (ロシア) ……   | 八  |
| くじやくと金のりんご    | ……… | (セルビア) ……  | 九  |
| 三人の王子とそのけものたち | ……… | (リトアニア) …… | 二四 |





さかなの騎士……………(スペイン)……二六

く……………ま……………二四

世界でいちばんすばらしいうそつき……………(セルビア)……二五

小屋のねこ……………(アイスランド)……二六

うらやましがりやのとなりの人……………(日本)……二七

トリッテイルとトリッテイルと鳥たち……………(デンマーク)……二八

三まいのきもの……………(アイスランド)……二九

リュートひき……………(ロシア)……三〇

王子の恩がえし……………(エストニア)……三一

解説……………二五



さ装  
して  
絵い

吉し

崎さ

正ま

巳み



■ ラング世界童話全集 ■

# ふしぎなこじきたち

ねずみいろの童話集



川端康成・野上 彰 訳

## ふしぎなこじきたち



むかしむかし、マークという名まえのあきんどがいました。みんなは、お金もちのマークとよんでいました。マークはとってもはくじょうな人でした。まずしい人たちの力になってやらず、家の近くにきたこじきのすがたを見ると、いつも、めしつかいたちにいいつけて、おっぱらわせたり、犬をけしかけたりするのでした。

ある日、三人のとてもまずしい年よりが、家へきてものごいをしました。それで、マークがおそろしい犬のつなをといて、けしかけようとしたとき、おさないむすめのアナスターシャが、そつとそばへきていいました。

「ねえ、おとうさん。今夜はここで、あのまずしいお年よりをねかせてあげて……おねがだから。」父はむすめのいうことがことわりきれず、三人のこじきに、屋根うらでねてもいいと、ゆるしてやりました。夜、うちじゅうのものがぐっすりねむってしまうと、おさないアナスターシャは、おきあ

がって、屋根うらにのぼっていつて、のぞきこみました。

屋根うらのまんなかで、つえによりかかり、三人の年よりが立っていました。ながい灰色のひげは、手の上をおって、下へたれさがっていました。三人はひくい声でおしゃべりをしていました。いちばん上の年よりが、たずねました。

「なにかしらせはないか。」

二ばんめの年よりが、こたえました。

「となり村の百しょうイワンのところに、七人めの男の子がうまれたところだ。どんな名まえにして、どんな運をさずけてやろうか。」

三人めのが、ささやきました。

「ワシーリ、とよぼうよ。それからいまわたしたちが立っている、この屋根うらの持ちぬしで、入り口のところでわたしたちをおっぱらおうと考えていた、あのなさけしらずな男の財産を、みんなワシーリにやろうよ。」

それから、もうすこしおしゃべりをして、用意をしてそつと出ていつてしまいました。ひとことのこらずきいていたアナスターシャは、まっすぐおとうさんのところへとんでいつて、いまきいたことをすっかりものがたりしました。

マークは、とてもおどろきました。考えて考えて、朝になると、となり村に、そりにのつていつ



て、そんな子どもがほんとうにうまれたかどうか、みつけようと思いました。はじめに司祭のころへいって、この教区にいる子どもたちのことをたずねました。司祭はいいました。

「きのうこの村で、いちばんまずしい家にひとりの男の子がうまれましたよ。かわいそうなその子に、ワシーリと名まえをつけてやりました。

七ばんめにうまれた子で、いちばん上のがまだやっと、七つになったばかりで、みんな、めいめいがひとくちずつも、たべることができないくらいです。こんなこじきの子どもの名づけ親を、ひきうけてくれるような人があるでしょうか。」

マークの胸は、どきどきしました。こころのなかには、かわいそうな赤んぼうにたいして、よからぬ考えがあふれていました。

「わたしが名づけ親になってやりましょう。」

そういつて、りっぱな洗礼式のお祝いをいつけました。赤んぼうは、つれてこられて、洗礼をうけました。マークは、父親にたいへんしたしそうにしていました。式がすむと、イワンをそばへよんでいいました。

「ねえ、相談があるんだ。あなたはまずしい人だ、どうしてこの子をそだてていけるか。わしにくないか。そうしたらちゃんとしてやるよ。そのうえ千クラウン(お金の単位で、一マイルは約一・六キロメートル)をおくりものにあげよう。いはなしじゃないか。」

イワンは、頭をかいて、考えて考えてから、うなずきました。マークはお金をかぞえてわたし、赤んぼうをきつねの皮にくるんで、そののなかにおき、自分はそのそばへすわって、家のほうへかえっていきしました。二―三マイル(距離の単位で、一マイルは約一・六キロメートル)いくと、そりをとめて、赤んぼうをけわしいがけのはしまでもつていき、なげおろして、小さな声でつぶやきました。

「そうら、おれの財産をとつてみる。」

それからまもなく、二―三人の外国のあきんどが、その道を旅をしてきました。マークにあって、まえにかりていた一万二千クラウンのお金をはらうためにです。がけのそばを通りすぎようとする、泣き声がきこえましたので、のぞいてみると、雪がふたつの大きな山にむりやりにおしのけられて、すこしばかりの、みどりいろの牧場がありました。その牧場のたくさんの花のあいだに、赤んぼ

うがおかれていました。

あきんどたちは、赤んぼうをひろいあげ、氣をつけてくるんでから、そりにのっていききました。マークにあつて、とてもふしぎなものをみつけた話をしました。マークは、すぐにその子が名づけ子にちがいないとわかったので、見せてくれとたのんで、それからいいました。

「とてもかわいい子だ、手もとにおきたいな。この子をわたしにくれたら、あなたたちの借金は、ちようけしにしましょう。」

あきんどたちは、こんなすばらしいもうけものはないとよろこんで、赤んぼうをマークの手もとにおいて、立ちさつていききました。

夜になると、マークは赤んぼうをたるのなかにいれ、ふたをきちんとして、海のなかにほうりこみました。たるはかなり遠くまでながれていつて、やがて、修道院のそばへただよっていききました。お坊さんたちは、岸のところで、ちようど、あみをひろげてかわかしていました。そのとき、泣き声がきこえたのです。その泣き声は、水ぎわにぶかぶかしているたるからきこえてくるようでした。坊さんたちは、たるを陸にひきよせて、あけました。するとそこに、赤んぼうがいました。僧院長がそのしらせをきくと、子どもをそだてることにきめて、ワシーリと名づけてやりました。

坊さんたちのなかで、その男の子はそだてられ、かしこいやさしい、うつくしい若者になりました。だれよりも、読んだり、書いたり、うたうのが、じょうずでした。なんでもじょうずにできるので、



僧院長はワシーリを聖衣保持者にしました。

ところで、そのころになって、マークが旅に出て、その道すじにあたる修道院にまいりました。

坊さんたちは、ていねいにマークをもてなして、家や教会や、そのほかすべてのものを見せてやりました。教会にはいっていくと、合唱隊がうたっていました。そのなかのひとつの声が、たいへんすんでいてうつくしかったので、マークはそのうたい手はだれかと、たずねました。それで僧院長は、ワシーリがここへくるようになった、ふしぎなできごとをものがたりしました。マークは、自分が、これまで、二どもころそうとした、名づけ子にちがいないと、はつきりわかりました。

マークは僧院長にいました。

「あの若い人の歌をきいていると、どんなにたのしい思いがするか、口にはいえないくらいです。

あの人をわたしにまかせてくれるなら、わたしの仕事をみんなかんとくする人にしてやりましょ  
う。いわれるように、性質もよく、かしこい若者だ。気まえよくわたしにくださいな。財産もこさ  
えてやりましょ。それに、お札に二万クランのお金を、修道院にさしあげます。」

僧院長は、ずいぶんためらいました。それでお坊さんみんなに相談をしました。やがてみんなは、  
ワシーリの幸運をじゃましてはいけなときめました。

それで、マークは、おくさんに手紙を書き、ワシーリにその手紙をもってやらせることにしまし  
た。その手紙のなかには、こんなことばが書いてありました。

《この手紙をもつていったものがついたら、せつけん工場へつれていって、大きなボイラーのそば  
を通るとき、なかへおしこめろ。わしのいいつけにそむいたら、わしはとてもはらをたてるぞ。  
この若者はわるいやつで、生かしておいたら、わたちみんなを、ほろぼしてしまふにちがいな  
い。》

ワシーリは、気もちのいい船旅をつづけて、岸にあがると、マークの家へあるきはじめました。そ  
の道で、三人のこじきに出あいました。こじきたちはたずねました。

「どこへいくんだ、ワシーリさん。」

「あきんどのマークのところへいくんだよ。おくさんにあてた手紙をもっているんだ。」

「その手紙を、わたしたちにお見せ。」

ワシーリは、手紙をわたしました。こじぎたちは、その手紙をふっと口で吹いて、ワシーリにかえしていました。

「さあいつて、マークのおくさんに、この手紙をわたしなさい。だいにされるだろう。」

ワシーリは、マークの家へついて、手紙をわたしました。おくさんは手紙を読んで、自分の目が信じられないので、むすめをよびました。手紙には、はつきりこう書かれていました。

《この手紙をうけとったら、すぐに結婚式の用意をしろ。つぎの日に、手紙をもっていいたものと、むすめのアナスターシャと結婚をさせろ。もしもおまえが、いいつけにそむいたりしようものなら、わたしはたいへんはらをたてるぞ。》

アナスターシャは、手紙をもってきた人を見て、たいそう気にいりました。みんなは、ワシーリに、はれぎをきせて、そのつぎの日、アナスターシャと結婚をさせました。

やがて、マークが旅行からかえってまいりました。おくさんも、むすめも、養子も、みんな出むかえました。ワシーリを見て、マークは、おそろしくはらをたて、おくさんに、くってかかりました。

「いったいどういふつもりで、わしのゆるしもないで、あの男をむすめのむこにしたんだ。」

「あなたのおいつけにしたがつたままですわ。」

ここにあなたの手紙がありますわ。」

マークは手紙を読みました。たしかに、自分の書いた手紙でしたが、けっしてそうしたいとは思わないことでした。マークは考えました。

へうん、おまえは三ど、わしの手からにげたな。

だが、こんどこそ、おまえをうんといいにあわせてやろう。V

マークは、ひと月すぎるのをまっています。

そのあいだ、むすめとむすめの夫にとでもしんせつで、気もちよくしてやっています。ひと月すぎると、ある日、ワシリーにいました。

「この世のはてにある、うつくしい国。そこに友だちのへびの王さまがいるのだが、そこへ、わ

